

中国・北宋の詩人、蘇軾は政治家としても卓越した力量を発揮した。それがアタとなつて敵しい処罰を受けたり、辺地に左遷されたり、何度も憂き目を見ていた▼それでも彼はいつも力強く生き抜いた。その気丈な精神を支えたのが、何でも肯定的に受け止める人生観だという(川合康三著「生と死のことば」岩波新書)▼代表作の「赤壁の賦」は有名な古戦場を舞台に、友人と船遊びをした様子を歌に詠んだもの。友は自分の一生の短さを悲しみ、果てしなく流れる長江をうらやんだ▼これに答えて蘇軾は、水と月を例に挙げこつ返した。水は流れ去るけれど、無くなることはなく次から次へと流れてくる。

### 越山若水

2018.1.9

満ちては欠ける月もまた、忽然と消え去るところはない▼変化という視点で見ると、長江も月も人間も常に変わりゆく。しかし不変の観点からは、いずれも今なお存在し続ける。造物主が惜しみなく披露する美しい景色を、さあ楽しもう―と蘇軾は歌つ▼「人の生は仮の宿り」。人生のはかなさを意味するこの言葉は、中国の古詩文に繰り返し登場する。日本でも鴨長明の「方丈記」で見ることが出来る▼歴史を振り返れば、名だたる先哲もみな生きることに悩んでいた。だから庶民が思い悩むのは当然のこと。きょうから2018年が実質的に始動する。苦しいときも蘇軾に倣い、前向きな人生観を指針にしたい。